

●発行：宗教者9条の会・大分 ●〒879-5102 由布市湯布院町川上3561 見成寺 TEL 0977-84-2257 FAX 0977-84-5203

西川重則著『梨の木舎』『有事法制下の靖国神社—国会傍聴10年、わたしが見たこと聞いたこと』を読んで

真宗大谷派安養寺住職 林正道

著者の西川重則氏は、一九二七年生まれのキリスト者であり、戦没者遺族の一人である。あらゆる宗教宗派が、かつての侵略戦争に全面的に協力加担してきたことへの痛恨の想いから、彼は、一九六九年に靖国神社法案が国会に提出されたとき以来、危機感をもって、一貫して靖国問題に関わってきた。さらに一九九九年、いわゆる「新ガイドライン国会」の年は、ほぼ欠かさず国会傍聴を続けてきている。本書は、著者が見た一九〇一年にわたる「ほだか一九二七年生まれのキリスト者の国会 傍聴記」である。この間に、さまざまなきことが起こった。一九九九年には、野中広務官房長官がA級戦犯分祀発言。二〇〇〇年には、「憲法調査会」の設置と森首相の「神の国」発言。二〇〇一年には、小泉首相の誕生と九月一日のアメリカの同時多発テロ発生。〇三年には、「テロとの戦い」の名のもとに「有事法制三法案」を可決。アフガンやイラクへの自衛隊の海外派兵が本格化。毎年、小泉首相や石原東京都知事などが靖国神社参拝。〇五年には「昭和の日」が成立、〇六年には教育基本法が改悪され、憲法「改正」のための国民投票法案も成立。麻生首相のもとで〇九年、自衛隊の海外での武力行使と海外派兵恒久法に道を開く「海賊対処」派兵新法案を強行。この国はいつたい、どこへいこうとしているのか。その中で靖国神社は、どういう役割を果たそうとしているのか。まさか若い人たちが、「祖国防衛」のために戦い、戦死した時のために…と考えているのでは。本書は、そのことを具体的に明らかにし、資料としても使いやすいように、月ごとに見開きで収められている。小生は、靖国神社法案が国会

判らないことに耐えられず  
ふとした風におののく  
弱い葦・人間

日本国憲法 第9条

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

若し人たちが、「祖国防衛」のために戦い、戦死した時のために…と考えているのでは。本書は、そのことを具体的に明らかにし、資料としても使いやすいように、月ごとに見開きで収められている。小生は、靖国神社法案が国会

# 人は何故カルトに陥るのか

真宗大谷派勝福寺住職

藤谷知道

オウム真理教が地下鉄にサリンを撒いた事件から、はや十三年が経つ。若き青年たちが狂気に駆り立てたものは一体、何だったのだろうか。

高学歴の青年たちが、麻原彰晃の説く「空中浮遊」や「ハルマゲドン」などの奇妙奇天烈な教説を信じていたことが明らかになった時、驚かされた人がいたであろうか。

こうして日本中の人があげた「えー、なんで？」という疑問に答えてくれたのが、マインド・コントロールという説明であった。おおかたの人がそれを聞き、「なるほど、そういうことだったのか」と納得し、オウムのことは自分に関係ないことと安心していったのではなからうか。

たしかに、宗教カルトが人々を虜にしていく現象はマインド・コントロールということ

で説明できるかも知れない。

しかし、もう一步突っ込んで考えてみるならば、本来自由を求めてやまないはずの人間が、なぜ、自分を束縛し自分を疎外していくようなマインド・コントロールに進んで引掛かっていくのか、という疑問が残るのではなからうか。

「なんで高学歴の青年が？」と多くの人が不思議がったが、実は、「高学歴だからこそだったのではなからうか。動物は決してマインド・コントロールにはかからない。マインド・コントロールということは、人間だからこそ引き起こされる現象なのである。今一度、「人間とは何か」、考えてみなければならぬ。

ともあれ、オウム真理教にとどまらず次々と出てくる宗教カルトの問題は、自己の課題を宗教において解こうとする私たち宗教者にとつて見過ごすことのできぬ大問題である。

## 「知」の落とし穴

### ■意識をもつ故に迷う

今ももう青年になっていく息子がまだ幼かった頃、家の猫を撫でながら、「お前は、食べて寝るだけで、いいなー」と呟くのを聞いたことがあります。私も同感しきりでした。そこにはもう「人間」の息苦しさや、幼くして始まっていたのでありましょう。人間は他の動物と違って意識を手に入れました。意識を通して外の世界を対象化し、それを思うように動かすことを始めました。ここから人間は驚異的な飛躍を遂げ、ある意味で地球の征服者になりました。

木のように生老病死と一つになって生きることが出来なくなりました。自分の思い通りには決してならぬ生老病死に一喜一憂せずにおれなくなったのです。こうした生老病死と一つになれない心の在り方を「迷い」ともいいます。これは「人間」が背負わねばならぬ重荷であります。

しかし同時に、「人間」という在り方は意識をもったが故に、犬猫や草

人間は意識をもったその時から根源的に迷っている、これが、釈尊から二千数百年受け継がれてきた仏教の考え方です。これは、現代人が是非とも一考すべき考え方だと思えます。近代科学の思维方法に慣れ親しんだ日本人は、いつしか仏教的な感覚をなくしていつているように思います。今では多くの日本人が、自分分は迷っているなどと思うことがなくなつたのではないのでしょうか。

しかしその一方で、若者も大人も、生きることには四苦八苦しています。小学生の低学年にまで鬱病の症状が見られるようになり、社会生活を送ることさえ困難な青壮年が増え、歳をとればとるで空しさに耐えられず、切れる老人や自死する老人が増えてきました。

科学がいかに進むうとも、生活がいかに便利になろうとも、「意識をもつが故に迷わずにおれない」ということにおいて、いつの時代であろうとも全く同じであります。否れどころか、科学が発展したということが逆に、意識の問題までもが解決したかのような幻想を生み、かえって迷いは深まっているというのが現代の状況ではないでしょうか。

### ■意識とは？

ある時ラジオから、動物生態学の先生のおもしろい話が

流れてきました。多くの人が、人間と人間以外の存在との間に断絶があると思っているようだ、それは間違いで、本当は類人猿と他の生き物との間に大きな断絶があるということです。その断絶とは「意識」をもったことから生まれたのです。

類人猿から始まった意識は「自・他」の意識を生みました。それを象徴するのが「鏡」だ

と言います。犬や猫は鏡を見て身繕いをすることはありません。人間は一歳にもなれば鏡を見てニヤーと笑うようになります。鏡に映っているのが自分だということが判ったからです。この鏡を見るときは行為はニホンザルなどではまだおこらず、ゴリラやチンパンジーとなつて始まるそうです。

それから人間は意識をもつようになつて、死ということを知ることになりました。植物や動物が寂かに死んでいくのに対し、人間は生きている

内から「死」の恐怖に囚われ（とら）てしまうのです。それは「死」を観念できるからでありましょう。動物生態学の先生は類人猿と人間だけが背の届く深さでも溺れることから、そこに「死」の意識の成立を見ておられました。

### ■「分別」意識

このように自と他、生と死を知り分けることのできる人間の意識を、仏教では「分別」と言います。なぜなら人間の認識は、主客が対立したうえに、しかも対象をバラバラに「分（別）ける」ことではじめて成り立つ認識である、からであります。例えば、我々に具わっている「分別意識」によつて人間の身体を認識しようとするならば、人間の身体を分解して、頭と首と胴体と手と足で成り立っていると

理解します。しかし、よくよく考えてみれば、頭と首の境はどこにあるでしょうか。手

と胴体の境界線は引けないはず。あるいは、こうも言えます。頭と首と胴体と手と足をもつてきて引付けられた、生きた人間が出来上がるかと。

人間の事実、いのちの世界は、決してバラバラな部分の寄せ集めではありません。頭のない胴体もなければ、胴体のない頭もありえないのです。昨日のない今日はなく、明日は必ず今日の続きなのです。このように、いのちはいつでも全体であつて、しかも瞬時もとどまらず流れていきます。

ところが人間の分別は、それをバラバラにした上でその一部だけを知つたに過ぎないのに、対象の全てを知つたと思ひこむようになってくるのです。このため人間は誰も皆世界の評論家となつて生きているのです。自分を愚かとは思えないものなんです。これは煩惱より始末の悪い迷ひであります。

### ■判らぬことに耐えられず

現代の若者が日本に伝えられた大乘仏教に関心を示さず、原始仏教なり、チベット密教に関心を示すところには、物事を単純化して判つてしまいたいという現代人の氣質がのぞいているように思えてなりません。

私たち現代人は驚異的に発展した科学の恩恵を受けて生活しています。宇宙のことから命のことまで、現代科学は、素人の人間でも判るように映像化して見せてくれます。いつしか私たちは、台風や地震のメカニズムまでも、自分の眼で見てきたように解説できるようにになりました。

こうした時代に生きていると、人間の心という複雑きわまりない現象さえも簡単に判ることができるよう、知らず知らずのうちに錯覚してしまふのではないのでしょうか。そればかりか、判らないこと

に耐えられなくなっているようです。それは、あたかも、豊かな時代に育った者には貧乏を耐えることができないのと、よく似ています。

■「知」の裏に潜む「畏れ」

判らぬことに耐えられない、というところには深い理由があります。なぜなら、人間にとって「知性」は闇夜を照らす懐中電灯みたいなものであって、なんにも判らぬまま生きることは、闇夜を懐中電灯なしに歩むことになるからです。人間にとって判りたこと、自分が生きたこと、自分がかくためた根源的な欲求などは、食欲、性欲、睡眠欲の三つをもって根源的な欲求といいますが、人間はそれに知識欲が加わった存在なのです。この知識欲は他の三つの欲望とその性質を異にしている、「畏れ」の感情に支えられているのです。

仏教は人間の根底にある畏

れを開いて「五怖畏」の教説を立てます。詳しくいうと、死畏、不活畏、悪名畏、墮悪道畏、大衆威徳畏、の五つです。死畏というのは、死の畏れです。不活畏は、ご飯が食べられるかという生活の畏れです。悪名畏というのは、ダメな奴だと言われぬかという畏れです。墮悪道畏というのは、地獄に墮ちるのではないかという未来への畏れです。大衆威徳畏というのは、世間を信ずることができず世間を畏れて萎縮することです。

振り返れば、正しい者であろうとしてきた私の心の根っこにあったのは、この五怖畏でした。その畏れから逃れるために私は「知性」を武器にしていたのだと思います。

■ふとした風におののく葦

パスカル(1623～1662)は「人間は一茎の葦にすぎない。自然のうちでもっとも弱

いものである。だがそれは考える葦である。…われわれのあらゆる尊厳は、思考のうちにある。…これこそ道德の本源である。」(白水社刊『パンセ・347』由木康訳)と言ったということです。この『パンセ』は、キリスト教の信仰を深めた晩年のパスカルが、無神論者たちを論破してキリスト教へ回帰させようとして書きためた断片を集めたものです。そこには、科学者でもあったパスカルの知性への信頼がうかがえます。

それに対し、信國淳(1904～1980)という仏教者はパスカルの言葉をもじって、「ものを思う葦であるために、ふとした風にもおののかなければならぬ弱い葦こそ人間なのだ」(『いのちは誰のものか』所収「自由と運命」・樹心社刊)と言っております。おもえば二十一世紀を前にして、科学の発達を嘲笑うかのように、若者の間にオカルトブームや超能力への憧れが広がりまし

た。オウム真理教はそんな時代の風潮の中から出てきました。そして今、オウム真理教の悲劇など遠い昔の話のように、細木数子氏や江原啓之氏などの占いや心霊話が人々の心を虜にしています。まことに人間は「ものを思う葦であるために、ふとした風にもおののかなければならぬ弱い葦」なのです。

■第二、第三のオウムが：

ことに二十一世紀に入ってから急速に、私たちの生活は自然から遠ざかり大地性を失ってきています。身体を温め合うはずの家庭までもが崩壊し、人間を取り囲んでいるものが全て人為的に作り上げられたものになりつつあります。そのため、人間はいのちの促しに従って生きることが出来なくなり、なにごとく意識を使って生きるほかなくなってきました。これでは、科学の発達に反比例して心霊

話が増えていくことでしょう。なぜなら「意識」でもってしか世界に触れることが出来なくなればなるほど、「ふとした風にもおののかなければならぬ弱い葦」としての人間が露わになってくるからであります。

人間は科学を使って地球に君臨しているけども、人間の心が科学的だというのはありません。「考える葦」であるが故に、かえって迷う者であり、進んで迷信的な世界に入り込んでいく存在なのです。しかも困ったことに、自分分は迷っていないと思う形で、迷ってしまう存在なのです。第二、第三のオウム真理教が生まれ、もっと大きな悲劇を引き起こすのではないかと、心配せずにはおられません。

## 人間の危機

## ■「私とは何者か？」

このように、人間は自他、生と死を知り分ける意識をもったが故に、「私とは何者か？」とか「死んだらどうなるのか？」という問いをもたずにおれなくなりました。人間という在り方は、一切を知り一切を支配しようとした「栄光」の影に、実に難しい問いを抱えてしまったのです。

ゴーギャン (1848～1903) に「我々はどこから来たのか？ 我々とは何者か？ 我々はどこへ行くのか？」と題した大作があります。これは、自分の居場所を探して、流れ流れてタヒチまで来ながら結局、安らぎの場を手に出れなかったゴーギャンの遺言のような作品です。ゴーギャンは「我々はどこか

ら来たのか？ 我々とは何者か？ 我々はどこへ行くのか？」という人間の最も根源的な問いに対し答えを出せぬまま死を決意しました。このことは独りゴーギャンだけのことはなく、日本にあつても北村透谷、藤村操、有島武郎、芥川龍之介、太宰治等々、多くの文学者が答えの得られぬ問いを前に死を選んでいきました。

## ■「死ぬか、気が違うか、宗教に入るか」

「私とは何者か？」とか「死んだらどうなるのか？」というような問いは一步間違えば人間を破滅に導く問いなのです。夏目漱石の『行人』に、

知性によって正しく生きようとする主人公が「死ぬか、気が違うか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」と呟く話が出てきます。これはイギリスに留学し、宗教を排した近

代的な知性で自我を確立しようとしていた漱石自身の追いつめられていた心境を物語っているものです。

『行人』では、それを伝え聞いた弟に「私は兄さんの話を聞いて、はじめて何も考へてゐない人の顔が一番高い」と云った兄さんの心を理解する事が出来ました。兄さんが此の判断に到着したのは、全く考へた御蔭です。しかし考へた御蔭で此の境界には這入れないのです。」とかわせています。漱石は「知性」に立つ人間の危険性をよく知った上で、その克服を課題にしているのです。

漱石は小説を書くという行為を通して、自分の代わりに『行人』においては主人公を狂わせ、『こころ』においては主人公を自殺させながら、どこかに生きていける道はないかと尋ね続けていたのだと思います。そうして辿り着いたのが「則天去私」という宗教的な世界観だったのです。

## ■「見ざる、聞かざる、言わざる」

すべてを対象的に認識する科学でもつてものごとを考へるようになった現代人は、人間を超越し人間を包摂する大いなるもの(神、仏)を信じる事が困難になりました。

それに連動して、「私とは何者か？」とか「死んだらどうなるのか？」というようないのちの奥底から湧いてくる問いに対して答えを見つけないのが困難になりました。科学的な思惟方法に慣れ親しんだ現代人は、そうした実存的な問いに対してまでも生理現象として、または物理現象として、あるいは人間関係でもつてしか応えることができなくなつたのです。

しかし、こうした客観的な応えでは人間の心は満足できません。先の問いは、死ぬという事は心臓が止まることだとか、誰もが死ぬように

なっているのだとか、誰それが涙を流してくれるとか、そんな説明で納得できる問いではないのです。誰もが、いつかは死ぬということが判つていても、それでは、なぜこの私なのか、どうして今でなければならぬのか、という問いの答えにはならないのです。

それでもなお、その問いに真向かおうとするならば「死ぬか、気が違うか、夫でなければ宗教に入るか」というギリギリのところを追い詰められることになってしまいます。だから多くの場合、本能的にそれを回避して、そうした問いには「見ざる、聞かざる、言わざる」を決め込み、とりあえず今日の一日を楽しく過ごす「気晴らし」的な生き方にならざるを得ないので、それが現代の先進国の状況ではないでしょうか。もうここにあつては、「私とは何者か？」という問いは深められる事もなく、放り出

されたままになっていきます。そんな社会に生まれ出た若者たちの絶望は深いことでしょう。オウム真理教の若者たちが社会から孤立し狂気を深めていった責任の一端は、私たちの社会にあると言えるのではないのでしょうか。

■ものを思う「我」

「クレヨンしんちゃん」で象徴されるように、幼い時から小賢しくあれこれとものを感じることに慣れ親しんだ現代人は、ものを思い行為をする主体をもって「私」と思っているのではないのでしょうか。私はそのように考えたというか、それ以外考えられないくらい自明のことでありました。

自意識の目覚めてきた思春期、私には父が最低の者として見えなくなっていきました。その結果、父を軽蔑し、父に反発し、父の支配から脱出しようと思うようになりま

した。この意識は焼け付くように熱く、どんな人、どんな言葉でも冷ますことが出来なかったことを思い出します。

その頃の私は、口を開くたびに「私は：」「私は：」と言い募っていたのではないのでしょうか。この「私は」という意識は、今から思えば、夢幻の意識に過ぎません。焼け付くように熱かろうとも、それから自由になれぬほど囚われていようとも、それは妄想に過ぎないのです。たったこれだけのことさえも、仏教を学ぶことでようやく判ったことなのです。

■いのちの事実に向く

なぜかと言えば、この時の「私」は父や母との関係が切れており、父や母が私にかけたい願いに気づくこともない「私」だったのです。「私を生かしているいのち」の事実は、父と母の子であり、父

や母から願いをかけられた子どもとしての私でした。「私を生かしているいのち」の事実から言えば、父や母の背景には無数の人々が控えており、久遠の過去から永遠の未来まで続く歴史(時間)が広がっていたのです。それが本当の「私を生かしているいのち」の事実です。

なのに「私」という意識は、「私」の思いで「私を生かしているいのち」の事実を取捨選択し、観念化された「私」を築くのに夢中になっていたのです。さらには一旦動き出した自意識は坂道を転がり落ちる石のように加速して周りのものを蹴散らしていきました。学校の先生を見下し、社会を嫌悪し、気づけば恐ろしい高見に一人上がって、もう下界には下りてこれなくなっていたのです。一切のいのちと繋がりが、永遠のいのちを受けついでいる「私を生かしているいのち」の事実からもっとも離れたところで「私

という意識は宙づりになってしまいました。これは単なる個人的な経験でなく、意識をもって生きる人間に必然する顛倒であります。

■「幽体離脱」

オウム真理教の人々の手記を見ると、時々「幽体離脱」という言葉が出てきます。なんでも「幽体離脱」とは、意識だけが身体から離れて、空中を自由自在に移動しながら自分自身やこの世を観察する、というもののようです。オウム真理教の人々はこの経験こそリアルなことと思っています。

意識というものは、もともと自己自身を対象化するようできており、その結果、自己自身を外から冷ややかに見るようになっていきます。だからといって、見る自分と見られる自分と二つに分けて、見られる自分より見る自分(意識)の方が「本当の私」とい

うなら、それは病んだ意識と言わざるを得ません。オウム真理教の人々が言っている「幽体離脱」なるものは、ものを思う意識をもって「私」と思うようになった現代人がたどり着いた必然的な帰結であったとも言えます。それは、冷めた狂気とも言えるのではないのでしょうか。

オウム真理教の悲劇を目の当たりにしながらも、次々とカルト宗教が生まれてくるのも、あるいは、霊感商法に欺される人が絶えないのも、ものを思う意識をもって「私」とする限り必然することだと思えます。

オウム真理教はヨガによる自己変革を目指して異常なまでの苦行を行いました。一見すると、オウム真理教は観念的でなく実践的あるいは身体的な宗教と見えるかも知れませんが、彼らの身体は自然的な身体ではなく、観念化された身体なのです。この身、このいのちを「私」とせず、思

いを「私」とするが故に、わが身を煩惱の巢窟のように憎んで痛めつけコントロールしようという発想が生まれてきたのです。

さらには身体の酷使の果てで悲鳴をあげた生理現象を宗教的な経験と勘違いし、光を見ただの、真理を覚ったのと陶醉していききました。こうしたことも、すべてが意識の顛倒から起こったと言わねばなりません。

### ■意識の顛倒をどう超えるか

以上、オウム真理教が引き起こした悲劇の背景を尋らうちに、「煩惱」の問題から「意識」の問題へと展開していききました。こうした問題は「マインドコントロール」以前の問題です。もつと言えば、マインドコントロールを成り立たせるもとにある問題です。確かにオウム真理教の起こした事件の構造を説明するためには、絶対的な暴君として

信者の上に君臨した「麻原彰

晃」と、彼を最終解脱者として盲信した信者の関係を明らかにしなければならぬことでしょうか。その関係が心の呪縛

による支配であったことを思うと、マインドコントロールという視点が事件の解明に必要なようになってくると思います。

しかし、それだけでは真の問題解明にはなりません。なぜなら、そんなに恐ろしいマインドコントロールに、なぜ自ら進んで飛び込んでいったのか、という疑問が残るからです。言うまでもないことです

ですが、人間以外の動物ではマインドコントロールなどということは起こりません。マインドコントロールということとは、ある意味で、最も人間的な現象とさえ言えるのです。だからこそ、「人間」という在り方、つまり「意識」をもつものとして生きるほかない「人間」という在り方まで遡るのぼって、オウム真理教の問題を考えねばならぬと思うの

### ■如実知見

仏教に「如実知見」とか「如実修行」とかいう言葉があります。心に振り回されることを脱して、「実の如く」に見、生きていくことを教えるのです。榎本栄一(1903-1988)さんという人にこんな詩があります。

晩年をゆく(『光明土』)

雨ふれば傘をさす  
お日さまあつければ  
帽子をかぶる  
足もとくれば  
あるかない

そつと(『群生海』)  
どうにもならんことは  
そつと  
そのまましておく

人間とは意識があるがために、このように「あるがまま

ないがまま」を生きることで出来ないので。それどころか、意識の方がいのちの支配者となつて、いのちの事実を自分の思い通りに変えようとしてもがくのです。これが仏教のいう「迷い」です。人間がいかに思おうとも「私」という意識が「私自身」ではなく、それは妄想であります。

仏教は、オウム真理教の人々が思い誤つたような、煩惱の否定ではなく、意識の迷妄からの目覚めをこそ教えようとしていたのです。人間の意識の迷妄に警鐘を鳴らしていた仏教が廃れた今、多くの日本人が「私」という意識をもつて本当の私と思ひ込んでしまっています。このような思いこみから、どんな悲劇が起こされてくるのでしょうか。

麻原は裁判で「すべては弟子がやったことだ」と言いました。それを聞いた者は、彼一流の言い逃れと、いよいよ怒りを燃やすことになりましたが、はたしてそれは全くのそれら言なのでしょうか。どう考えても、麻原の力だけであれだけ多くの人間をマインド・コントロールにかけることなど不可能です。やはり、弟子たちの中から、進んでマインド・コントロールにかかつていった部分があるのではないでしょうか。そのことについて考えてみた一文を次号に掲載させていただきます。

**宗教者9条の会・大分  
事務局**  
〒879-5102  
由布市湯布院町川上 3561  
見成寺  
TEL 0977-84-2257  
FAX 0977-84-5203  
年会費 3,000円  
郵便振替口座 01720-1-111731

世話人 (◎代表者)

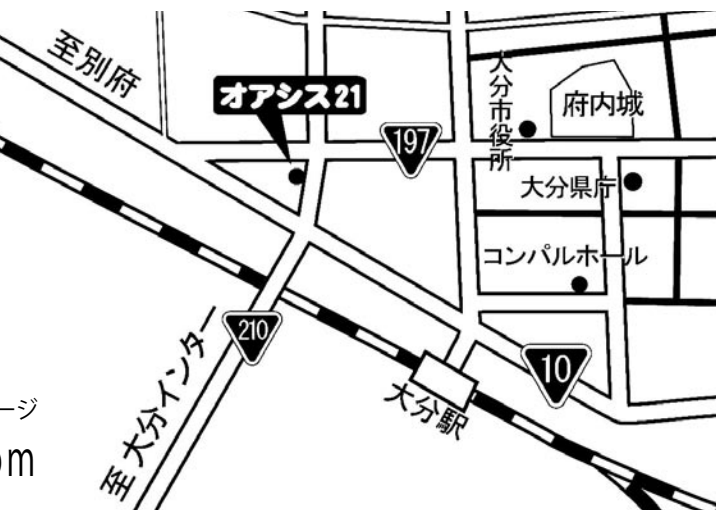
- 無着成恭 曹洞宗 泉福寺
- 酒迎天信 日本山 妙法寺
- ◎日野詢城 大谷派 見成寺
- 林 正道 大谷派 安養寺
- 西郡 均 本願寺派 誓岸寺
- 古谷 聡 大谷派 蓮照寺
- 佐々木淳二 大分メノナイトキリスト教会
- 掛橋泰定 日蓮宗 妙栄寺
- 大在 紀 本願寺派 長光寺
- 野口春夫 日本基督教団津久見教会
- 永井一匡 アライアンス大分キリスト教会

年会費納入・カンパを  
よろしく願います。

宗教者9条の会・大分 ホームページ  
<http://9jo-oita.com>

ちしてきます。(詢)

▽ 藤谷さんの原稿も総てを1回に載せることが出来ず、つづきは次号に載せます。編集部としては嬉しい悲鳴ですが、みんなの通信、多くの人の声を掲載したいと思えますので投稿下さいお待ちしています。(詢)



☆講演会終了後「宗教者9条の会・大分」の総会を行います。

テーマ **「殺すことなかれ」**

講 題: 消えかかった命を救ったのはあなた

日 時: 2009. **5.18** 月

開場13時・開演13時30分・終了16時10分～総会

会 場: **オアシス21 音の泉ホール**

大分県大分市高砂町2-33オアシスひろば21内  
JR大分駅から徒歩約10分

松本サリン事件から15年。  
警察の捜査方法、マスメディアのあり様等々、  
現代社会に警鐘を鳴らした事件。  
その中心的存在の河野氏が今、語る。



**入場無料**

共催 宗教者9条の会・大分  
大分教区宗会議員を囲む会(大宗会)

お問い合わせ **0977-72-2905** (大宗会)  
**0977-84-2257** (9条の会)

河野義行氏講演会

編集後記

▽ 鯉のぼりが泳ぐ季節は茶摘みの季節。数日前の霜で見事なまでに新芽がやられてしまった茶畑の下草刈りをしました。茶摘みは何時になる事やら。夏と冬が同居する様な天候が続く、体調不良の方も多いのかと思います。

▽ 会報18号、日本基督教団・津久見教会の野口春夫さんに、「今の状況の中で一番気になることをレポートして」と無理をお願いしながら次号に回させて頂くことになりました。「人工衛星騒動の中に潜む恐ろしさ」というタイトルでしたが、申し訳ありません。